昭和十四年十一月

倉知鐵吉氏述

韓國併合ノ經緯

外務省調査部第四課

目次

		頁
一、	緒言	一
二、	韓國併合方針ノ確立	一
三、	併合ノ字義	一一
四、	對韓細目要綱基礎案	一三
五、	内田良平氏ノ「回想録」	一五
六、	伊藤公暗殺事件前後	二一
七、	併合ノ斷行	二九

倉知氏略歴

明治三年一二月石川縣二生レ、同二十七年七月東京帝國大學法科大學卒業〇同年内務屬ニ任シ。爾後外務省參事官（二回）、公使館書記官（獨逸國在勤）、農商務省、統監府等ノ兼任書記官、日本専管居留地經營事務監督官、横須賀捕獲審檢所評定官、政務局長、外務次官等ニ歴任シ、其ノ間帝國議會ニ於ケル政府委員タルコト八回、大正二年二月官ヲ辭シ貴族院議員ニ勅任セラル

一、緒言

韓國ヲ併合スルニ至リシ經緯ニ就テハ、其ノ議ニ興リ、其ノ眞相ヲ知ル者ハ何レモ物故シ、今日残ルハ私一人トナツテシマツタ。世ニ傳ヘラレル所謂韓國併合裏面史又ハ其ノ眞相ト講スルモノニハ事實ヲ距ルコト遠イ點ガアルノデ、ソレヲ訂正シ旁〻其ノ眞相ヲ後世史家ノ爲茲ニ述ベテ置カウト思フ。

二、韓國併合方針ノ確立

明治四十二年ノ春、伊藤公ガ統監ヲ辭スルコトニナツタノデ、其

ノ後任ヲ誰ニスルカト云フ詮議ガアリ、結局副統監曾禰子爵ヲ昇任サセルコトニ内定シタ。

従來、對韓政策ハ總テ統監ニ一任シテ、政府ハ餘リ之ニ干渉シナイ方針デアツタガ、是ハ伊藤公デアツタカラソレデ宜カツタノデ、今度曾禰子爵ガ統監ニナツタカラトテ同様ニ政府ガ干渉シナイデモ宜イト云フ譯ニハイカヌ、寧ロ曾禰子ヲ統監ニスル以上ハ政府ノ訓令通リニヤラセネバナラヌトノ議論ガアツタ。ソコデ曾禰子昇任ヲ決定スルニ就テハ先ヅ以テ政府ノ對韓方針ヲ決定シテ曾禰子ニ示シ、曾禰子ガソレニ同意シタ場合ニ初メテ統監ニ任命スルト云フコトニナツタ。一方、伊藤統監ノ施策ハ餘リニ穏健ニ過ギルト云フヤウナ

批評ガ世間ノ一部ニ起ツテ來タ際デモアツタノデ、政府ガ對韓政策ノ大方針ヲ確立スルコトハ喫緊ノ要務トナツタ。而シテソレヲ書面ニシテ置クコトガ必要ニナリ、其ノ原案ノ起草ヲ小村外務大臣カラ私（政務局長）ニ命ゼラレ、之ニ關スル大臣ノ意見ノ大體ヲ述ベラレタノデ、私ハ其ノ趣旨ニ基イテ立案シ、更ニ大臣ガ之ニ修正ヲ加ヘテ確定草案ガ出來タ。該案ハ極メテ簡單ナモノデ僅カ二箇條シカナイ。

帝國ノ韓國ニ對スル政策ハ我實力ヲ該半島ニ確立シ之カ把握ヲ嚴密ナラシムルニ在ルハ言ヲ俟タス日露戦役開始以來韓國ニ對スル

我權力ハ漸次其大ヲ加ヘ殊ニ一昨年日韓協約ノ締結ト共ニ同國ニ於ケル施設ハ大ニ其面目ヲ改メタリト雖同國ニ於ケル我勢力ハ尚未タ十分ニ充實スルニ至ラス同國官民ノ我ニ對スル關係モ亦未タ全ク満足スヘカラサルモノアルヲ以テ帝國ハ今後益ゞ同國ニ於ケル實力ヲ増進シ其根底ヲ深クシ内外に對シ争フヘカラサル勢力ヲ樹立スルニ努ムルコトヲ要ス而シテ此目的ヲ達スルニハ此際帝國政府ニ於テ左ノ大方針ヲ確定シ之ニ基キ諸般ノ計量ヲ實行スルコトヲ必要トス

第一、適當ノ時機ニ於テ韓國ノ併合ヲ斷行スルコト

韓國ヲ併合シ之ヲ帝國版圖ノ一部トナスハ半島ニ於ケル我實力

ヲ確立スル爲最確實ナル方法タリ帝國カ内外ノ形勢ニ照シ適當ノ時機ニ於テ斷然併合ヲ實行シ半島ヲ名實共ニ我統治ノ下ニ置キ且韓國ト諸外國トノ條約關係ヲ消滅セシムルハ帝國百年ノ長計ナリトス

第二、併合ノ時機到來スル迄ハ併合ノ方針ニ基キ充分ニ保護ノ實權ヲ収メ努メテ實力ノ扶植ヲ圖ルヘキコト

前項ノ如ク併合ノ大方針既ニ確定スルモ其適當ノ時機到來セサル間ハ併合ノ方針ニ基キ我諸般ノ經營ヲ進捗シ以テ半島ニ於ケル我實力ノ確立ヲ期スルコトヲ必要トス

此ノ原案は嚴祕ニ付シ、三月三十日外務大臣カラ桂總理ニ示シタノミデ、其ノ他ニハ元老ニモ閣僚ニモ見セナカツタ。ソレハ如何ナル理由カト云フニ、先ツ第一ニ伊藤公ノ之ニ關スル意見ガ判明シナカツタカラデアル。

伊藤公ハ韓國將來ノコトニ就テハ全然兎角ノ言ヲナサズ、其ノ眞意ヲ推シ測リ兼ネタ。私ハ兼任書記官デ事實伊藤統監ノ秘書官デアツタノデ、同公ガ京城カラ東京ヘ來ラレルト毎日會ツテ居ツタ關係上、同公ノ動靜ヤ意見ハ最モ能ク知リ得ル立場ニ在ツタガ、韓國處分ニ關シ如何ナル意見ヲ抱イテ居ラレルノカソレノミハ私ニモ分ラナカツタ。ソレニ就テ次ノ如キ一挿話ガアル。

某日（統監辭任ノズット前、明治四十一年中ノコトト記憶スル）大森ノ伊藤公邸デ晩餐を御馳走ニナリ、食後日本間デ寛イデ對談シタ。公爵は寢軈ンデウトウトシナガラ私ノ話ヲ聞イテ居ツタガ、「統監制ハ現狀ノ儘デハ不十分ダカラモツト强化スル必要ガアル」ト云フ意味ノコトヲ少シ强ク私ガ言フト、公爵ハムツクト起上ツテ、「現在ノ統監制ニ缺點ガアツテ之ヲ强化セネバナラヌトハ如何ナル譯カ承ロウ」ト開キ直ラレタ。ソコデ私モ遠慮ナク其ノ理由ヲ述べ、「韓國カラ外交權ト國防權ハ日本ガ取ツタケレドモ、經済的方面ハ一切我ガ手ニ收メラレズ、海關税、通貨、銀行等何レモ別國同様デアル」トテ其不都合ノ點ヲ縷述シタ。スルト統監ハ非常ニ興奮シタガ如ク

改マツテ一々私ヲ辨駁シタ。「今ノ時代ニ於テ外交ト軍事ヲ取リソノウチ司法権ヲ我ガ手ニ収メレバ決シテ他ノモノヲ急グ必要ハナイ。海關税、通貨、銀行等ガ別々ダト云フガ、一國内デモ外國ノ植民地ニサウ云フ例ハ幾ラモアルノミナラズ、現ニ日本デモ臺灣ハソレ等ノモノガ内地ト違ツテ居ルノデアツテ是ハ一向差支ナイ。ドウ云ウ譯デ之ヲ强化シナケレバナラヌト言フノカ」ト詰メ寄ツテ來タ。ソコデ私ハ形勢不穏ト見テ「尙ホ研究シマセウ」ト議論ヲ打切ツタ。

斯クノ如ク朝鮮ノコトトナルト伊藤公ハ努メテ其眞意ヲ暗ラマシ心ニモナイ議論ヲセラルル風ガアツタノデ、今度ノ處分案ニ就テハ統監ノ眞意ガ那邊ニ存スルノカ桂首相モ小村外相ニモ分ラナカツタ。

若シモ前記對韓方針ニ對シ伊藤公ガ反對ヲ表明シテ意見ノ對立ヲ見ルヨウナコトニナツテハ困ルノデ、桂、小村兩相トモ極メテ慎重ナル態度ヲ執リ、其ノウチ折リヲ見テ伊藤公ニ面接シテ内々デ意向ヲ打診シヨウト云フコトニナツタ。

四月初メ（其ノ時日ヲ記憶セヌガ櫻花ノ季節デアル）高輪ノ毛利公邸園遊會ガアツタ。其ノ際桂、小村ノ兩相ガ伊藤公ニ「少々御話シ申シタイコトガアルカラ近日中ニ兩人デ御訪ネ致シタイ」ト豫メ會見ヲ申込ミ、四月十日ニ兩相揃ツテ伊藤公ヲ靈南坂ノ官邸ニ訪ウテ、韓國ハ併合スル以外ニ途ガナイ、ソレニ就テハ斯ウ云フ方針デ進マウト思フト前記二箇條ノ對韓方針書ヲ見セタ。スル

ト伊藤公ハ直チニソレニ對シテ全然同感デアルト明言セラレタ。實ハ兩相トモ伊藤公カラ反對ノ言葉ヲ受ケルニ違ヒナイト思ツテ反對論ニ對スル辨駁ノ用意マデシテ行ツタノダガ、全然同感ノ意ヲ表サレタノデ寧ロ呆ツ気ニ取ラレタ位デアツタ。

伊藤公ノ贊成ナル意向ヲ確カメタ兩相ハ安心シ、ソレカラ初メテ曾禰子爵ニ案ヲ示シタ處同子モ贊成デアルト言ツタ。尤モ該案ハ勿論山縣公ニハ見セタラウト思フ。

其ノ後七月マデ極秘ヲ保チ、漸ク七月六日ノ閣議ニ於テ之ヲ議題ニ供シテ決定シ、同日御裁可ヲ經タ。

三、併合ノ字義

此ノ方針書中ニ於テ「併合」ナル文字ヲ初メテ用ヒタノデアルガ之ニ就テハ相當ノ苦心ガアツタ。

當時韓國ヲ日本ニ合併スルト云フ議論ハ世上ニ相當唱ヘラレタケレドモ、未ダ其ノ意味ガ能ク了解サレテ居ナカツタ。恰モ會社ノ合併ノヤウニ日韓兩國對等デ合同スルノダト云フヤウナ考方モアリ、又一方ニハ墺匈國ノヤウナ聯合國的形態ヲ採ルベシトスル考方モアツテ、文字モ「合邦」トカ「合併」等種々ノ文字ヲ用ヒテ居ツタ。

然ルニ小村外務大臣ハ、韓國ハ全ク日本ノ内ヘ入ツテシマツテ、韓國ト諸外國トノ條約モ無クナルノダト云フ考方デアツタ。兎ニ角

「合併」ト云フ文字ハ適切デナイ。サリトテ「併呑」デハ如何ニモ侵略的デ是亦用ヒラレヌ。種々苦心シタ結果、私ハ今迄使用サレタコトノナイ「併合」ト云フ文字ヲ新タニ案出シタ。是ナラバ他領土ヲ帝國領土ノ一部トスルト云フ意味ガ「合併」ヨリモ弱イ。ソレ以後ハ「併合」ノ文字ガ公文書ニ用ヒラレタガ、最初ニ用ヒタノハ此ノ對韓方針書ニ於テデアル。此「併合」ナル文字ハ全ク新ニ案出セラレタモノデ若シ改メテ之ニ決定スルト云フコトニナルト議論ノ出ルノハ必然デアルノデ私ハ黙ツテ此文字ヲ用ヰ餘リ荒ラ立テナカツタノデ桂總理ナドハ右方針書ヲ讀ミ上ゲルトキナド時々「併合」ヲ「合併」ト云ツテ氣付カズニ平氣ナコトガアツタ位デアツタ。

四、對韓細目要綱基礎案

對韓基本方針ガ確定シタカラニハ併合ノ順序、方法等ノ細目ヲ決定シテ置カネバナラヌ。ソコデ同七月中葉ノ討究ノ對象トナルベキ基礎案ノ起草ヲ小村外務大臣カラ私ハ命ゼラレタ。前回同様大臣ノ意見ノ大要ヲ指示サレ、ソレニ基イテ私見ヲモ加味シテ苦心ノ末一ツノ案文ヲ纏メ、更ニ大臣ガ修正ヲ重ネテ相當長文ノ基礎案ヲ得タ。併シ當時ノ考トシテハ韓國併合ヲサウ早急ニ實現スル積リハナク、ユツクリ研究スル眞ノ意味ノ基礎案デアツタ。

該細目要綱基礎案ハ外務大臣カラ桂總理ニ呈示シタガ、尚ホ伊藤

公ニモ見セタダロウト私ハ推測シテ居ル。何故カナラバ、伊藤公ガ満州へ渡ル直前私ガ同公ニ對シ「韓國處分案ハ御覧ニナリマシタカ。御意見ハ如何」ト尋ネルト、同公ハ前記基本方針書ノ方ノ返答ヲシタノデ、私ハソレデナク細カイ方ノコトデスト告ゲルト「マア大體アンナモノダロウ」ト答ヘラレタ。之ヲ以テ同公ガ該細目要綱案ニ眼ヲ通サレタコトハ確カデアロウト私ハ思ツテ居ル。然ルニ伊藤公ノ没後小村外相ハ、「韓國王室處分ニ關スルコトハ伊藤公ノ考ト自分ノ考ト同一デアツタ。自分ハ韓國王ヲ大公殿下トスル積リデ其ノ旨細目要綱案中ニモ掲記シタノデアルガソノ點ニ就テモ伊藤公ハ自分ト同意見デアツタ。實ニ不思議ナコトデアル」ト大イニ不思議

トセラレテ居ツタ。是ハ渡邊千秋伯ガ桂總理ノ許へ來テ「伊藤公ハ生前李王ハ大公殿下ニスルガ宜イト言ツテ居ラレタ」ト話シタノデ桂總理ハ更ニソレヲ小村外相ニ傳へ、同外相ハ不思議ナコトナリトシテ私ニ話シタノデアルガ、併シ何等ソレニ不思議ハナイ。小村外相ハ細目要綱案ヲ伊藤公ニ呈示シタコトヲ失念シテ居ツタノデアル。頭ノヨイ小村侯ガ細目要綱案ヲ伊藤公ニ見セタコトヲ忘レラレタト云フコトガ私共ニハ寧ロ不思議デアツタ。

五、内田良平氏ノ「回想録」

故内田良平氏ハ、當時民間ニ在ツテ韓國併合ニ大イニ盡瘁シタ一人

デアルガ、氏ハ生前私ニ向ヒ次ノ如ク語ツタ。

「小松緑氏ノ著書『朝鮮併合之裏面』中ニ君カラ小松氏ニ宛テタル覺書ガ掲載セラレテ居ルガ、其ノ内容ハ事實ニ相違シテ居ル。該覺書ニ依ルト、韓國併合ニ關スル基本方針ハ四十二年ノ四月初旬既ニ小村、桂、伊藤間ニ於テ確定シ後任統監曾禰子モソレニ同意デアツタコトニナル。

然ルニ事實ニ於テハ當時未ダ政府ハ韓國處分ニ關シ何等ノ確定方針ヲ有セズ、従ツテ曾禰新統監（註、六月十四日統監更迭）ガ其ノ所謂對韓基本方針ナルモノヲ知ラナカツタノハ勿論デアル。然レバコソ我々ノ併合促進運動ヲ强壓シタノデアル。我ガ政府ヲシテ遂ニ

併合實現ニマデ事ヲ進メシメタルハ一ニ我々ノ運動ニ因ルモノデアル。」

又黒龍會編「日韓併合秘史」下巻末ニ収ムル内田氏ノ「日韓合邦回想録」ニハ次ノ如キ記述ガアル。

「明治四十三年八月二十九日、併合詔書喚發ノ際、外務省ヨリ新聞記者ニ向ツテ、日韓併合ハ昨年七月閣議ニ於テ決定シタル豫定ノ行動ヲ執リタルモノナリト宣傳セシメタリ。近年ニ至リ伊藤博文公傳、桂太郎公傳等ヲ見ルニ、悉ク併合ハ明治四十二年七月中ニ決定シタルモノノ如ク記載セラレ、事實ヲ誤リ後世ヲ欺カムトスルモノアリ。余ハ私心ノ害毒千載ニ流布セラルルヲ憂ヒ、後世史家ノ爲メ

此ノ間ノ眞相ヲ開陳シ置クベシ。

當時合邦問題ハ、廟堂ノ證ニ二派アリ。山縣、寺内等の軍人派ハ合邦説ニシテ、伊藤、井上、小村等ノ文官派ハ現狀維持説ナリ。桂ハ後者ニ属スレドモ二派ノ両端ヲ握リ、自己ノ去就自由ナル地位ニ立テリ。四十二年二月、山縣公ハ伊藤公ニ向ツテ『最早、日本天皇陛下兼韓國皇帝陛下ト爲シ奉リテハ如何』ト發言セシニ、伊藤公大ニ其不可ナル理由ヲ論ジ、現狀ノ維持セザル可カラザル所以ヲ力説セリ。同年六月、伊藤公統監ヲ辭スルニ當リ、桂、曾禰ト密談シ『韓國ハ司法權ヲ我ニ収メ、暫ク現狀ヲ保チ其ノ結果ヲ見ルベシ』ト云フニ一決セリ。然ルニ此ノ密約アルニ拘ラズ、其ノ直後ナル翌七月

ノ内閣會議ニ於テ、合邦ノ議ヲ決シタリトハ何人モ信ズルコトハ能ハザルトコロナルベシ。伊藤、桂、曾禰三巨頭ノ密約ハ、曾禰統監ノ語リタル實話ニシヽヽヽヽヽ（中略）」

而シテ伊藤公ハ九月ニ至ルマデ絶對ニ合邦ノ意思ヲ持タナカツタト述ベ更ニ

「以上ノ事實ニヨリテ觀ルモ、合邦ノ議ガ前年七月中ニ決定セラレタリトハ、全然有リ得ザルコトニシテ、若シ閣議ノ席上此ノ問題ニ觸レタリトセバ、余等ガ主張セル合邦問題ニ就キテ、如何ニ對應スベキカノ研究的協議アリシ位ニ過ギザルベシ。然ルヲ當時決定セラレタルモノノ如ク發表セルハ、直言セバ、合邦ハ他ノ獻策ニ餘儀

ナクセラレタルモノニ非ズトノ装ヲ爲サンガタメノ飾言トモ見ルベキモノニシテ、廟議ノ決定セルハ、慥カニ九月下旬乃至十月初旬ナルヲ斷言セザルヲ得ズ。蓋シ此ノ問題ハ、七月ト九月乃至十月ノ間、僅ニ二三ケ月ノ差ニシテ、合邦成立上ヨリ見レバ何等ノ輕重ヲ見ズ、强イテ論ズベキノ必要ナキガ如シト雖モ、之レ史實ヲ誤ルノ甚シキモノナルニヨリ、此ノ機會ニ於テ一言ヲ添ユルモノトス」ト記サレテ居ル。

之ヲ要スルニ內田氏ノ叙述スル所ト私ノ說明トハ表面上越ユベカラザル喰ヒ違ヒガアル如クデアルガ、併シ此ノ喰ヒ違ヒノ因ツテ起リシ原因ハ對韓方針決定ノ廟議ニ興リタル巨頭ガ各〻固ク極秘ヲ守

リ、曾禰子モ亦絶對ニ口外シナカツタ所ニ在ルノデアツテ内田氏ハ此點ヲ全然知ラナカツタカラ自己ノ主張ヲ正シイモノト思ツテ居ルノデアル。其ノ點ヲ孝量スレバ兩者ノ說ガ決シテ相背馳スルモノデナク寧ロ一致スルモノデアルト私ハ信ジテ居ル。

六、伊藤公暗殺事件前後

既ニ我ガ政府ニ於テ韓國併合ノ大方針ヲ確定シタルコト右ノ如クデアルガ、其ノ斷行ノ時期ニ就テハ未ダ決定シテヰナカツタ。其理由トシテ茲ニ欧米各國トノ條約改正問題ニ付一言スル必要ガアル。言フ迄モナク幕府時代ニ締結シタル各國トノ舊條約ニ依リ我ガ國ハ法

権、税権共ニ非常ナ束縛ヲ受ケ、獨立國トシテノ権利ノ行使ニ多大ノ制限ヲ蒙リ各國ト甚シキ不對等ノ地位ニ在ツタノデ、此ノ束縛ヲ脱シテ速ニ完全ナル獨立國ノ實ヲ獲ムトスルノガ維新以來我ガ國民ノ熱心ナル希望デアリ、此ノ目的達成ノ爲ニ上下共ニ凡ユル努力ヲ拂ツテ各般ノ改革ヲ實行シ、即チ宮廷關係ノ改新ヲ初メトシ法律制度ノ改正、風俗習慣ノ變革等ニ至ルマテ事ノ條約改正遂行ノ目的達成ニ関聯スルモノ甚ダ多カツタカ如キ次第デアル。幸ヒニシテ陸奥伯時代ノ條約改正ニ成功シテ法権ノミハ之ヲ恢復スルヲ得タガ、税権ハ尚未ダ數箇國トノ間ニ片務的條約ガ殘ツテ居ツタ。ソコデ當時ノ桂内閣ハ、韓國併合ノコトモ勿論大問題デアルニハ相違ナイガ、ソ

レガ爲維新以來上下共ニ心血ヲ濺イダル税權回収、國權恢復ノ大目的ニ妨ゲヲ生ズル如キコトガアツテハナラヌト考へ、併合ノ斷行ハ條約改正ニ支障ヲ來サヌ時期ヲ選バネバナラヌ。場合ニ依ツテハ條約改正實現後マデ之ヲ延期スルモ已ムヲ得ヌト迄考ヘテ居ツタ人モアツタ位デアル。右様ノ狀態デアツタノデ併合斷行ノ時期ガ決定セヌノハ無理カラヌコトデアツタ。然ルニ此ノ時突如十月二十六日伊藤公ノ「ハルビン」ニ於ケル遭難事件ガ起ツタノデアル。

　伊藤公ノ「ハルビン」行ハ表面後藤新平伯ノ献策ニ依リ「ココフツオフ」ト會談スルノガ目的デアツタトサレテ居ル。又ソレニ相違ハナイノデアルガ併シソレト全然關係ノナイ一ツノ事柄ガアツテ之

ヲモ含ンデ伊藤公ハ「ハルビン」行ヲ決行セラレタノデアル。此ノ事ニ關シテハ知ル者ハ多クハナイガ、私ハ伊藤公トノ内密ノ話ニ依リ此クニ如ク斷定スルノデアル。併シ是ハ併合問題ト直接ノ關係ガナイカラ他ノ機會ニ譲ルコトニスル。

伊藤公遭難ノ報ヲ得テ日本内地ハ朝野愕然ト驚キ且ツ其ノ眞相ヲ知ルノニ苦シンダ。小村外務大臣ハ私ニ渡満シテ事件ノ眞相調査ト暗殺事件ノ對策ヲ講ズルヤウ命ゼラレタ。伊藤公ト特別ノ關係ガアツタ私ハ是非東京ニ同公ノ遺骸ヲ迎ヘ葬儀ニ關スル要務等ニモ盡力スルコトヲ希望シテ居ツタノデアルガ此ノ如ク小村大臣カラ渡満ヲ命ゼラレ、桂總理カラモ君ガ行ケバ自分モ安心ダカラ是非行ツテ呉

レト依頼ガアリ、又山本権兵衛伯カラモ亦是非行クガ宜カラウト言ハレタ次第モアツタノデ急ニ十月三十一日夕東京發渡満スルコトニナツタ。

其ノ頃東京デハ満州一帯ニ亘ツテ韓人ノ大暴動計畫ガアルヤウニモ考ヘラレテ、満州へ行クノハ命賭ケダト云フ風ニ言ハレ、私ノ出發ニ際シ弾丸除ケノ御札ヲ緒方カラ送ツテ呉レタ程デアリ又當時満州ニ於テ發刊スル支那紙中ニハ「日本ニ三奸アリ。伊藤、曾禰、倉知是ナリ。今ヤ伊藤ハ之ヲ除キタルモ尚二奸存シ、一奸ハ不日將サニ満州ニ來ラムトス」ト云フヤウナ意味ノ激烈ナ記事ガ表ハレタ様ナ次第デアツタ。

伊藤公の遺骸トハ海上デ擦違ツテ、十一月三日私ハ大連ニ到着シ夫レヨリ満州ヲ一通リ廻ツタ。其ノ時私ノ随行者ハ當時外務省参事官タリシ故佐分利君及新國副領事デアツタ。露國側ト面倒ナ關係ガ起ルノヲ惧レテ「ハルビン」ヘハ態ト行カナカツタガ、長春迄ノ各所ヲ廻ツテ韓人ノ狀況等ヲ調べ、最後ニ旅順へ落着イテ同地ニ長ク滞在シテ居ツタ。私ハ調査ノ結果、今度ノ暗殺事件ハ東京デ一部ノ人ガ想像シタ如キ大規模ノモノデハナク、浦鹽ニ在ル若干ノ不逞韓人等ガ計畫シテ之ヲ満州デ決行シタモノデアル。即チ其ノ根元ハ浦鹽ニ在リ而モ餘リ大規模ナモノデハナイト判定シタ。従テ浦鹽ニ於ケル不逞韓人ノ取締ハ當時我ガ長崎ニ於ケル露國無政府黨員ノ取締ト見

合セテ之ヲ行フコトトシ、當面ノ問題トシテハ旅順ノ法廷ニ於テ適法ニ本事件ヲ處分スレバ足ルモノト認メ、此際成ルベク事件ヲ小サク取扱フコトヲ必要トシ其旨ヲ政府ヘ献言シ政府モ大體其方針ヲ取ル積デアツタ。

然ルニ一方在韓國ノ一部日本人中ニハ、伊藤公暗殺ヲ韓國皇帝ガ使嗾シタモノトシテ之ヲ理由ニ此ノ際一擧併合ヲ斷行セシメムトシ、無理ニモ證據ヲ作リ上ゲヨウト策シ、私ガ旅順ヘ落着クト直グ韓國駐箚軍參謀長明石少將ガ乗込ンデ來タ。檢事側カラモ中川一介檢事正ガ來又外ニ韓語ニ通スル統監府ノ某警視等ガヤツテ來タ。是等ノ人々ハ旅順ニ潜在シテ被告韓人ヲ監視シ、合法、非合法ノ處置ヲ執リ

何カシラ證據ヲ擧ゲヨウト畫策シテ居ツタ。ソコデ是等韓國カラ來タ一派ト私等トノ間ニ非常ナ暗闘ガ起ツタノデアルガ、當時ノ白仁民政長官（大島都督ハ歸朝中）ハ嚴然ト中正ノ態度ヲ持續シ、司法官等モ亦毫モ政治的策動ニ動カサレル所ガナカツタ。私トシテハ政府ガ併合ノ大方針ヲ決定シタ以上之ヲ實行スルニハ最モ適當ナル時機ヲ選ブコトガ必要デ無理ヲシテ併合ヲ强行スルガ如キハ斷然不可ナリト信ジテ居ツタノダガ、韓國側ノ一派ハ一體併合ノ廟議ガ決定シテ居ルカドウカスラ知ラズ唯遮二無二此機會ニ併合ヲ實現セシメヨウト焦慮シタニ過ギナイ。白仁民政長官及ビ高等法院長（平石安人）等モ我々ト見解ヲ同ジクシ、犯人ヲ嚴罰ニ處スルハ勿論必要デ

アルガ之ヲ政略的ニ利用スルコトニハ全然反對デ毅然トシテ外部ノ壓力ニ應ジナカツタ。ソコデ事件處理ノ方針ハ略見極ハメガ付イタノデ私ハ一二月九日ニ旅順ヲ引揚ゲテ十三日東京ヘ歸ツタ。スルト韓國側カラ來テ居ツタ人々モ到底其目的ヲ達シ得ザルコトヲ覺リ私ノ旅順出発ト前後シ直グ歸韓シ茲ニ伊藤公暗殺事件ヲ利用シテ併合ヲ實行セントスル計畫ハ終焉ヲ告ケタ次第デアル。

七、併合ノ斷行

其ノ後次第ニ韓國ノ狀勢ガ悪化シテ到底放置シ難クナリ、且ツ我ガ國内外ノ形勢ニモ変化ガアリ最早併合ヲ斷行シテモ條約改正ノ事

業ニ支障ヲ來サヌトノ見込ガ付イタノデ、四十三年一月愈々即時斷行ノ方針ヲ確定シ、同年五月寺内陸軍大臣ヲ統監ニ任命シテ併合ノ大任ニ當ラセルコトニナツタ。

最初寺内統監ハ私ヲ朝鮮ニ同行シヨウトシタガ私ハソレヲ辭退シタ。ソコニ私ノ一ツノ見込違ヒガアツタ。即チ私ハ併合ヲ完了スルニハ相当ノ日子ヲ要スルモノデ寺内統監就任後一箇月ヤ二箇月デ片附クモノトハ思ハレズ、其ノ長イ期間中私ハ併合問題擔任者トシテ東京ヲ留守ニスルコトハ出來ナイ、從來ノ行掛リヲ一番能ク知ツテ居リ且ツ寺内伯トモ別懇ノ私ガ伯ニ同行スルノガ最モ好都合ナコトハ分ツテ居ルガ、折衝ガ長期ニ亘ツテ東京側ト打合等ヲスル場合ニ私

ガ東京ニ居ナクテハ困ルト思ツタノデ其旨ヲ寺内伯ニ話シ、事ノ次第ニ依ツテハ臨時ニ御手傳ニ行クノハ差支ナイガ當初ヨリノ同行ハ辞退シタイト云ツテ之ヲ斷ツタ。スルト寺内伯モ、ソレハ尤モダ、夫レデハ他ノ人ニショウト言ツテ私ノ同行ヲ取止メニシタ。然ルニ赴任後寺内伯ノ措置宜シキヲ得タル爲私ノ豫想ヲ裏切ツテ併合談判ハ極メテ順調ニ進捗シ、短時日間ニ諸手續ヲ完了シ流石ノ大問題タル韓國併合モ茲ニ其終結ヲ告ケタ次第デアル。